

# 伝統的都市の祭礼にみる共同性の維持と創造

## －山鉾祭礼の“祭縁”を事例として－

樋口 博美\*

### はじめに

祇園祭は、7月朔日の吉符入りから末日の夏越祭神事までの一ヶ月に渡る長期的な祭りであり、この間、各種の協賛団体によって主催される様々な神賑わい（祝賀行事）には京都の町の多様な人々が何らかの形で参加している。祭り行事のメインは、7月17日に八坂神社を中心にその社頭で行われる「神事」としての神輿渡御（神幸祭）とその一週間後の還御（還幸祭）<sup>1)</sup>であるが、もっぱら京都内外の多くの人々の関心を集めているのは、氏子が主体となり、神幸祭の先祓いかつ「にぎやかし」として始まった山鉾巡行の「祭礼」である。現在33町<sup>2)</sup>の各氏子町が主体となって山や鉾<sup>3)</sup>が出されているが、このような町を地元では「山鉾町」と呼ぶ。

本稿は、この山鉾町から出される山鉾巡行の祭礼をめぐる形成される山鉾町内外の社会関係のあり方を明らかにし、都市祭礼における地域共同性の現状に考察を加えるものである。

近代社会以降、私たちの生活は、それまでの伝統的な家や地域の慣習に則ったものから、多くの場面で個人自らが選択し、選び取る領域が拡大する生活のあり方へと変化してきた（松平 [1990: 10]）。血縁も地縁もかつてほど重視されなくなり、そこでの関係の取捨ですら個人の自由な選択に任される。しかし、このことは地域社会における共同性の観点からすれば一特に京都のような伝統的都市社会では一、既存の歴史的・伝統的共同性の維持が求められる一方で、常に新しい共同性が求められることを意味するのであり、時にはそれは、当該地域に住む人々や組織・集団同士の葛藤や対立として現れる。

そしてこのような都市においては祭礼も、血縁、地縁を中心とする伝統的な関係だけでなく、社会変動にともなって現れる社縁や選択的な縁（上野 [1984: 58]）などの新しい関係を、折り合いを付けながら取り入れることによって継承されてきた。

これらをふまえて本論文では、祭礼に関わって町内外に張りめぐらされている社会

---

\* 専修大学社会関係資本研究センター研究員・人間科学部教授

関係を「祭縁」<sup>4)</sup>とし、これを起点に、都市祭礼をめぐる共同性の現状を以下の手順で明らかにしていく。

まず、①山鉾町内において、地縁内の伝統的な祭縁に基づく中核的な人々からなる組織・集団が、祭礼の企画・段取り・資金繰り等の“運営”にたずさわり、「伝統的共同」を保持し、かつ進めようとする様子を述べていく。ここでいう「伝統的共同」とは、「伝統的な神事(祭)や慣習に価値を見出し、これを共に保持しようとする行為」とするが、本論文では、他の組織・集団の祭礼へのかかわり方およびそれらの組織・集団にとっての祭礼の意味を測るための概念として位置づける。続いて、②町外にある組織・集団が専門的な技能を提供することで祭礼を“実働”させることを述べ、彼らの「伝統的共同」へのかかわり方に着目することで“運営”組織・集団との長期にわたって継続してきた祭縁のしくみを明らかにする。最後に、③近年新たに山鉾町内に参入してきた新住民の「伝統的共同」へのかかわり方(非専門的な労務の提供)と、彼らに対する“運営”組織・集団の具体的な対応関係から見えてくる町内における新たな祭縁の実態について考察を加える。

「祭りは都市に沈潜する心性を表現しており、この心性は直ちに社会構造を突き動かす力にはならないが、都市の雰囲気を作り出し、そこに暮らす人々と地域との関わりを暗黙のうちに造り出(田中[2007:83])」す。祭礼をみていくことは、その地域に住み、日常を生きる人々の生活の構成原理と多様性について考える機会でもある。祭礼を通じた社会関係が、地域社会の既存の伝統的共同性(紐帯)の維持に、あるいは地域社会のなかの新しい共同性(紐帯)の形成と創造に関わってきたことにも言及できればと思う。

なお、ここで考察の対象となる事例等の内容は、主に2012年7月、2013年3月、5月、7月の現地における祭礼関係者への聞き取り調査および参与観察によるものである。また、本稿は2013年5月25日(土)に専修大学で行われたシンポジウム「再生するコミュニティ——伝統・継承・創造——」において報告した内容を元に、その後、分析枠組と構成を組み直して手を加えたものである。

## 1. 山鉾町内の祭縁と伝統的共同

### (1) 町衆の伝統とその共同

祇園祭は貞観11(869)年の祇園御霊会がその始まりであるとされている<sup>5)</sup>。平安京の発展にともなう夏の疫病蔓延と、政治的敗者の怨霊(によると考えられていた雷等の天災)に対して、朝廷が芸能奉納などによってこれを鎮めようとしたものであり、もともとは疫病鎮めと怨霊鎮めの「官祭」であった。その神事よりも人々の耳目を驚かす風流な山鉾祭礼を興隆させたのが中世末期に登場する八坂神社の「富める」氏子であり、「町衆」と呼ばれた商工業を基盤とした旦那衆集団であった。八坂神社の庇護の

元に座付きの商人として商い行為に励んでいた人々である。山鉾祭礼において、町衆が寄付や出金の形で飾り立てた山や鉾を、神に捧げると同時に、町内外の見物人に披露する行為は、彼らにとってその財力と教養を誇示する機会でもあった。もちろん、彼らが祭礼を単なる誇示の場としていたわけではない。

そもそも「町」は、生産の共同によって成り立ってきた「村」とは異なり、生業の単位が各家にある商工業者の家集団からなる社会であった。町の共同の要は、町会所や神社などに限られており、町内ではなんらかの共同のチャンスを利用して操作を加えない限り、共同行為が貫徹しにくい場所である。その町内共同性を固める方策のなかなかない（松平 [1983 : 33-35]）町内において、共同の機会となり、結束の要となったのが祭りであった。

今回聞き取り調査を行った山鉾町では、新しい住民が町内入りする際には、その人が町住者としてふさわしいかどうか「吟味」されて決められていたというが、特に、懸装品の購入や修復などの祭礼に関わる分担金（臨時の寄付も含め）が、身分に応じて皆に等しく課せられることについての了承・同意が求められ、これに賛同できない者は町に住むことを認められていなかった。また、持ち家に比べれば額面は低いものの、借家人にもわずかでも分担金を請け負ってもらうことが取り決められていた。このように町内皆のものであり、町の共同と要になる山鉾祭礼を財力で支え、とりまとめ役となって仕切り、“運営”してきたのが町衆であった。

また、「神社系の祭礼では、儀礼性が強固に守られる傾向がある（田中[2007 : 80]）」。それは儀礼を守る担い手が存在するからであり、それこそが町内に住む氏子たちであった。山鉾の祭礼も長らく町衆の氏子意識に支えられてきたが、彼らは祭礼のみならず日常においても町内の伝統や儀礼を規定し、それらによる慣習を維持する役割を担うことによって「伝統的な共同」を守る中核的な存在となってきた（田中[2007 : 137]）のである。

## （2）祭りの“運営”と伝統的共同

現在、山鉾町で祭礼の中核となっているのは、何代かに渡って町内に在住してきた土地・家を所有する家主と、土地・建物を所有する企業主である。かつて山鉾祭礼の中心的担い手であった大店の旦那衆、町衆と写し重ねられる存在である。それは、単に経済力としての中核というだけの意味ではない。一つは町内において祭礼に関わる“運営”の担い手、祭礼の中心となる人々であるということ、もう一つは町の伝統や格式を保持し、伝統的共同を維持しようとする人々であるということである。

そして、彼らによって組織されている実際の集団が「山鉾保存会」である。大正2年に小結棚町に放下鉾保存会ができるとその後、大正から昭和にかけてほとんどの山鉾町で、町内会組織とは別組織として、山鉾祭礼のための保存会がつくられていく。保存会の構成メンバーのなかで、理事として実質的な役に就くのが、土地・家所有者、もし

くは土地・建物所有の企業主の人々である。

山鉾保存会では、“運営”に関わる、つまり祭礼全体に関わるあらゆる①段取りと運営、またそのための②資金繰りを行っている。①の段取りの作業とは、ちまきづくり、会所飾り、鉾建て、ボランティア、アルバイトの手配など、祭礼に関わる作業全ての手配であり、神事的行事もある<sup>6)</sup>。また、これは祭りの時期だけではない。祭りの終了直後から部材や懸装品の点検、修理の手続き、次年度へ向けた確認、などを行う。②の資金繰りとは、複数にわたる経路からの資金の調達、予算を立ててその配分、執行を行うものである<sup>7)</sup>。彼らは、祭礼の遂行に必要なあらゆる作業について把握し、運営しなくてはならないのである。そして、その行為の過程は、町内の伝統的共同を維持するものであり、またそれを核として、町内の結束を保持しようとするものである。したがって、その責任は大きく、その分自負はとても強い。また、“運営”に関わるメンバーは、祭りに関わる会合が頻繁なのはもとより、町内会のメンバーと重複することからも、日常的にも顔を合わせる頻度が高く、必然的に日常的かつ持続的な関係である。

しかし、後で見ていくように、町内のビル・テナント化が進んだところでは、居住者ゼロという山鉾町もあり、そこではかつての町内居住者が祭の運営を行っている場合もあり、また、町内に土地・建物を所有する企業組織（企業主）が、特に資金と人材の提供という意味で存在感を持ち、祭の運営組織の主要メンバーとして名前を連ね、活動している。また対照的に、山鉾町内でのマンション化は、確かに人口増加という意味では心強いことなのだが、それは多くの場合、伝統や慣習に対する関心の希薄な住民の増加と、それらを守る立場の人々や組織の減少・縮少を意味する。近年、多くの町内で在住年数の長い、伝統的共同を重んじ、意識する中核的存在はほんの一握り、という状況である。

それでも、中核的な人々からすれば、山鉾祭礼はあくまでも「町内の祭」であり、「自分たちのため」の祭りである。町内の祭りとしてのしきたりを守ること、町内の伝統的共同を守り、その結果町内が結束されること、が重要である。次はそれを示す具体的な話である。

鉾曳き・山担ぎに関わるボランティアとして、祇園祭連合会<sup>8)</sup>によって組織されている公的なものに「ボランティア21」がある<sup>9)</sup>。毎年参加して慣れている者も多いが、山鉾町内の運営集団の人々が心配・憂慮しているのは、この「慣れ」である。ボランティア参加者に「自分たちが祭を主催していると思いきみ、勘違いしている人たちがいること」である。時にはそのことについてボランティアたちへの直接的な注意を促すこともあるという。祭りを動かしているのはあくまでも「伝統的共同」にもとづく町内であり、町内が主体の祭りであるという「祭の『主旨』を理解してもらうこと」が、“運営”組織・集団にとって重要なことなのである。

**1の小括** 現在、山鉾町内の土地・家の所有者（家主）もしくは土地・テナント所有者（企業主）が祭りの運営に携わって祭りの中心となるのであり（彼らの祭礼をめぐる関係は密）、彼らは町の伝統や格式、伝統的共同を町内の核となって維持しようとしている。現実の組織としては、各山鉾町の山鉾保存会があり、祭礼の遂行に関わるあらゆる作業について把握し、運営、執行している中心的な存在である。

## 2. 継続してきた町外祭縁

### (1) 町外住民の祭りへの協力

都市の祭礼は、その都市だけでは完結しない。ある特定の町内を組織母体としながら、運行にあたって不足している人的資源を町外から動員している。地域外から祭りに参加してくることは、地域内から言えば、地域から「はみだして」ゆくことである。この「はみだし」が都市祭礼の特徴である（田中 [2007:93]）。王城のおかれた都として早い段階から都市化してきた京都では、祭礼についても町外との関係なくしては語るができない。その長い祭礼史において、外部調達型祭礼であることの典型的な例の一つとして挙げられるのが、豊臣政権による洛中町割整備を経て確立したとされる「寄町制度」である。天正19（1591）年に創設され、明治期に廃止されるまで近世を通じて各山鉾町内の祭礼を支えた制度である。山鉾巡行に際して山鉾町に一定量の米銭等（地ノ口米）を納め、それによって巡行経費を分割負担するとともに、祭礼に参加し、諸役を奉仕した氏子町を寄町といった。先に述べたように、町衆によって支えられてきた山鉾祭礼ではあるが、寄町は応仁の乱という大きな戦乱後、山鉾再興の際の明応5（1500）年の記録に既に現れている。山鉾町ではないが、それに隣接し、山鉾建営に共同して参加した町を「より町」と呼んだようであり、「寄町」の最初の形成状況であったといわれる。その後、山鉾町からはやや離れた地に現れた寄町は、天正の町割以後の新町に属するものであった。つまり、この町割は、新しく設定された洛中（新洛中）内に「祇園社氏子地域」が整備・設定され、これらの町が、従来の「より町」とは異なる原理で山鉾町の「寄町」とされたものである。それまでの共同体的で町人の主体性によったより町の成立に対して、新しい「寄町制度」には権力者による寺社政策、都市政策的な再編や規制の意図があったと考えられている（祇園祭編集委員会他 [1976:53-54]）。このように、共同体的な内的要因のみならず、外的で政治的な要因のなかで、都市のなかの外部調達型の祭りとして山鉾祭礼は規定されてきたのである。寄町がどのように各山鉾町へ配分され、決められたのかの詳細は不明だが、表1に示したように最も多くの寄町を持っていた「鶏鉾町」の場合、寄町数は19町、最も寄町の少ない町は「三条町」で1町であった。山鉾町に属する寄町は固定され、幕末まで変化がなかったのであり、これが近世のあいだ山鉾祭礼を町外から支え続けたしくみである<sup>10)</sup>。

また、寄町以外にも、「カネとクチは出すがチカラはださなかった（松平〔1983：57〕）」旦那衆に代わって、実働として、労力を要する人足仕事には洛外、市外から労働力が用立てられていた。後にも述べるが、鉾建てなどの作業にかかわるのは、特殊な職能を持った人々や集団に委託する必要があったのである。

現在でも山鉾町33町から繰り出される「山鉾巡行」は、その多くが町外の人々の協力と労力の提供によって維持・遂行されている。聞き取りの中でも、現在の祭礼にも多くの町外の人的要員がいるという話におよんで、保存会の理事が「あんな大きくて重たいもん、わたしらよう運んだり組み上げたりできません…」と前置きした上で、「我々にとって非常に貴重な人たちですよ」と述べた言葉は山鉾町の歴史を象徴しているようである。

表1：各山鉾町の寄町数

| 番号 | 公称町名(山鉾名)  | 寄町数 | 番号 | 公称町名(山鉾名)  | 寄町数 |
|----|------------|-----|----|------------|-----|
| 1  | 天神山町(霞天神山) | 0   | 18 | 烏帽子屋町(黒主山) | 8   |
| 2  | 善長寺町(綾傘鉾)  | 0   | 19 | 山伏山町(山伏山)  | 8   |
| 3  | 三条町(八幡山)   | 1   | 20 | 百足屋町(南観音山) | 8   |
| 4  | 郭巨山町(郭巨山)  | 2   | 21 | 風早町(油天神山)  | 8   |
| 5  | 蟻螂山町(蟻螂山)  | 3   | 22 | 岩戸山町(岩戸山)  | 8   |
| 6  | 橋弁慶町(橋弁慶山) | 3   | 23 | 燈籠町(保昌山)   | 8   |
| 7  | 傘鉾町(四条綾傘)  | 4   | 24 | 太子山町(太子山)  | 9   |
| 8  | 函谷鉾町(函谷鉾)  | 4   | 25 | 四条町(大船鉾)   | 9   |
| 9  | 鯉山町(鯉山)    | 5   | 26 | 骨屋町(浄妙山)   | 10  |
| 10 | 占出山町(占出山)  | 5   | 27 | 場之町(鈴鹿山)   | 12  |
| 11 | 白楽天町(白楽天山) | 5   | 28 | 芦刈山町(芦刈山)  | 12  |
| 12 | 矢田町(伯牙山)   | 5   | 29 | 小結棚町(放下鉾)  | 13  |
| 13 | 役行者町(役行者山) | 6   | 30 | 船鉾町(船鉾)    | 13  |
| 14 | 六角町(北観音山)  | 6   | 31 | 月鉾町(月鉾)    | 14  |
| 15 | 木賊山町(木賊山)  | 6   | 32 | 菊水鉾町(菊水鉾)  | 18  |
| 16 | 笋町(孟宗山)    | 7   | 33 | 鶏鉾町(鶏鉾)    | 19  |
| 17 | 長刀鉾町(長刀鉾)  | 7   | 合計 |            | 246 |

〔出所〕 祇園祭編集委員会、祇園祭山鉾連合会編著『祇園祭』筑摩書房、1976年 p.67を参照の上作成

## (2) 祭りの“実働”をになう人と組織

ここでは、“運営”組織・集団と町外の組織・集団との間でむすばれる祭縁について、①ちまきづくりと②鉾建て、の2つの作業に関わる人物・組織の事例を取り上げ、(a)仕事内容と専門度、(b)伝手と関係期間、(c)山鉾町とのつきあい方(伝統的共同性への関与)、(d)組織・集団内の関係とコミュニティ、の四点に着目しながら考察する。

### ①ちまきをつくる人々

現在、宵山の期間から巡行当日まで多くの山鉾町内で見物客に有料で販売配布され

ているものの一つにちまきがある<sup>11)</sup>。ちまきの売上金は、ほとんどの山鉾町において祭りの重要な資金の一部となっている。そのちまきはすべて近郊農家による請負で作られており、ここで見られるしくみは都市部と農村部の分業関係でもある<sup>12)</sup>。

事例：ちまきづくり元締め T 氏（女性、76 歳）

(a) 仕事内容と専門度

材料の仕入れから準備、完成まで全て行うので、ほとんど1年がかりの仕事である。祇園祭が7月に終わると、9月～10月には次の年の材料となる藁とクマ笹の手配を始める。藁とクマ笹もちまきづくりに必要な形状のものが手に入りにくくなり、また値段も上がっているため、（どこで安くいいものが入手できるか、といった）情報を集めながら準備に入る。T 氏の場合、山鉾町から受けた注文を、作業に参加したいという近所の女性たちからの希望を聞き、担当本数の配分を決める。各家で仕上がったものを再び回収し、出荷の準備をするといったとりまとめも T 氏である。藁をクマ笹で巻いてちまきを1本ずつ作り（写真1）、10本を一つに束ねて（写真2）配布用の「ちまき」1つが完成である（写真3）。根気と繊細さの必要な作業である。工賃は出来高制なので、作業にはある程度のスピードも必要である。今年は2カ所の山鉾町から全部で7100束の注文があり、これを近隣の4人の女性たちへ発注した。

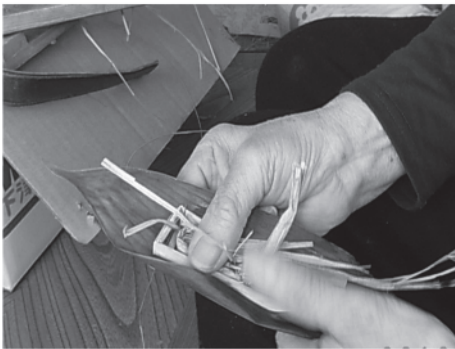


写真1：藁を笹で巻く作業（筆者撮影）

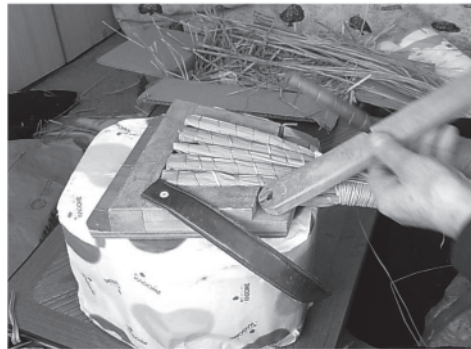


写真2：10本を一束にまとめる作業（筆者撮影）



写真3：箱詰めされる完成したちまき（筆者撮影）

#### (b) 伝手と関係期間

嫁いできたときには、姑（明治31年生）が作業を行っており、その姑が嫁いできたときにも既に作業を請っていたと聞いている。T氏も家の仕事として、自明のこととして作業を覚え、そのまま引き継いだが、山鉾町からどのような伝手でいつからこの仕事を引き受けるようになったのか正確なことは不明である。その昔、周辺地域では米を作る農家が多く藁が容易に手に入り、また近くの山では笹が豊富に取れたため、山鉾町から請け負うことになったのだろう。今でもこの地域は山鉾町のちまきづくりを請け負っている家が多く、その多くが女性である。姑が嫁いできた頃には、本物の餅を入れた食べることの出来るちまきを巻いていたと聞いているので、大正期から昭和期にかけて、藁を詰めて大量に作る今の形になったのではないかという。いずれにせよT氏の家では三代以上は続いており、現在2つの山鉾町と取引をしているが、一つは世代を超えて同じところから、もう一つの町は、T氏の代からである。農閑期の収入源としても、また家事との両立も可能な貴重な作業であり、今後娘にも引き継いでもらえればという思いがある。

#### (c) 山鉾町とのつきあい方（伝統的共同への関与）

山鉾町との普段のつきあいは全くない。祭りが終わるとしばらくして来年は何本お願いしたいと連絡が来る。それを受けて準備に入り、年明けの春に追加注文分を確認、必要に応じて受注する。祇園祭のはじまった7月の初旬に山鉾町に収めに行く。直接的に山鉾町に関わるのはそれだけである。一度、T氏のところよりも安く請け負ってくれるところがあるからと山鉾町から取引を解消されたことがあったが、変更先のちまきの出来に満足できなかった山鉾町からやはりこちらへお願いしたいと取引が復活したことがある。技能を信頼されていることに誇りがある。

祭り期間になると山鉾町へご祝儀を出す。「お祝い事だから」、「本当は金一封がよいのだろうけれども…」お金がかかるので、毎年ビール1ケースを持って行くのが慣例



になっている。伝統的な祭りに関わることができたことも誇りであり、ありがたいことと感じている。亡くなった姑もやりがいを感じ、感謝をしながら作業をしていた。

(d) 組織・集団内の関係とコミュニティ

T氏はいわゆる“元締め”であるが、それを請け負う近所の女性たちは、普段からつきあいのある信頼の置ける農家の女性たちである。したがって、お願いも気安く、時には庭にシートを敷いて「和気藹々とおしゃべりをしながら」、「楽しく」一緒に仕事をする関係である。また、ちまき10本を一つにまとめる作業は比較的力が必要である。T氏の場合、夫がその作業を手伝ってくれることもあった。また、クマ笹刈りに家族総出で出かけたりすることもあった。このように、家族が仕事の合間や、また引退後に一緒に作業をすることも珍しくなかったのである。

この事例に代表されるように、藁とクマ笹で成形されるちまきは、山鉾町が近郊の農家（山鉾町からは車で15分ほどの農村地帯上賀茂地域）に発注し、受注した「元締め」となる農家の主婦女性を中心に、材料の準備に始まり、一年かけて作業が進められる。元締めとなる人は、近所の請負を希望する複数の人々に作業とその分の材料を配分し、作業後の回収ととりまとめの後、山鉾町へ納品する。熟達した技能が必要であり、有償で請け負われてきた。また、山鉾町が複数の農家に頼むこともあれば、農家が複数の山鉾町から請け負う場合もあるが、いずれにせよ山鉾町と農家の関係は同じところで世代を越えて引き継がれている。“運営”組織・集団と、直接連絡を取るのは受注と納品の時だけであるが、町の祭礼に関わることへの自負は高く、町のお祝い事に対する祝賀の気持ちやあいさつも忘れない。

②鉾を建てる組織・集団

2つの事例：手伝い方の頭M氏（事例1）と工務店主K氏（事例2）

(a) 仕事内容と専門度

まず、すべての鉾建てに共通の仕事内容について説明する。

高さ20メートル以上、重さ10トン以上にもなる鉾を建てる作業は、特別な技能を必要とすることからも、先にも説明したように、近世の時代から寄町とは異なる町外の人々によって担われてきた。鉾の軸となる槽組、釘を用いずに縄だけで組み上げていく縄がらみ、そして鉾の中央に立てる真木立てまでを行う手伝い方（写真4）、当日囃子方が乗り込む鉾の上部分の床、手摺り、柱、天井、屋根を組み立てる大工方（写真5）、車輪を取り付ける車方（写真6）、これら作事三方とよばれる三者が実質的に鉾を組み上げる。祭礼当日も巡行の際、三方それぞれに役割がある。手伝い方は鉾の前に乗って音頭取りを、大工方は屋根の上に乗って障害物をよける等のバランス調整を、車方は道具を使っての方向転換など鉾の舵取りを行っている。特に大工方は作事三方のなかで最も専門的で、大工を職業とする人たちが担当することがほとんどである。

基本的に、山鉾町は作事三方の作業を、それぞれを専門とする三つの組織・集団に発注する。しかし現在では、三者それぞれに頼む山鉾町に加えて、一括して一人の親方に頼む山鉾町もあり、最近では後者が増えているという。ここでは、三方それぞれに請負を頼んでいる山鉾町の手伝い方頭M氏の例と、三方の作業を山鉾町から一括して請け負っている工務店主S氏の例を事例として取り上げて考察する。

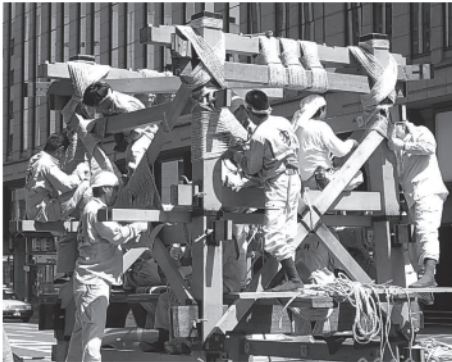


写真4（2枚組）：手伝い方作業：縄がらみの様子（筆者撮影）



写真5：大工方作業：屋根部分の取付（筆者撮影）



写真6：車方作業：大きく重い車輪部分（筆者撮影）

#### (b) 伝手と関係期間

##### 事例1：鉾建て 手伝い方頭M氏

鳶・土工業（創業1845年）の7代目M氏（男性）の事業所は京都市内であるが、山鉾町外である。山鉾町との関係は、戦前に祖父の代から手伝い方を請け負っている。それ以前は祖父の知り合いの同業者が請け負っており、その人が辞めることになった

ために祖父がそれを引き継ぎ、現在に至っている。

事例2：鉦建て 工務店主S氏（4つの山鉦を請負う）

県外で営んでいた工務店を父親が昭和の初めに京都へ移したのが創業である。S氏は、父、兄を継いで三代目である。工務店の場所は市内であるが、京都駅から南下したところで、山鉦町とは離れている。

請負先の山鉦町の鉦は幕末の元治の大火で焼けてしまい、「休み鉦」として、ご神体だけが守られてきた。これをS氏の父親の代に、得意先の主人が自分の住む山鉦町の鉦を再建したいとの話を持ちかけてきた。昔の図面などを参考にして作事三方の作業を全て一括担当し、昭和28年に復活が実現した。これが山鉦町との関係の始まりであり、それ以来、兄の代、自分の代と三代半世紀以上に渡って鉦建てを請け負ってきた。

鉦が復活する際に初めて鉦建てに参入したが、それ以降、その実績を活かして現在では他にも3つの山鉦建てを請け負っている。

(c) 山鉦町とのつきあい方（伝統的共同への関与）

事例1：鉦建て 手伝い方頭M氏

山鉦町と直接的に連絡をかわすなどの関係は限られており、祭礼の期間に集中している。作業期間中に保存会の人々が時折声をかけてくることはあるものの、特に町内の人々が手伝うわけでもないので町会所での反省会への参加が、その年の山鉦町との最後の関わりである。ただし、部材の新調や修理に関しては祭り期間外に行われるため、その際には山鉦町やその他の場所に出向いて意見やアドバイスなどを求められることもある。

祭り期間中、特に町内会から神事や儀式に呼ばれることはないが、吉符入りの当日に、S氏は一人で八坂神社に詣でて鉦建ての無事を祈る。

事例2：鉦建て 工務店主S氏

山鉦町との直接的な関係は、祭礼時に限定、集中する。しかもS氏のところでは、縄がらみによる鉦の骨格を作るところまでは工務店内の作業場で行うため（それからそれをトラックにて山鉦町内に運び込む）、ますます町内の人々との関係は限定される。しかし、修理や改修のための建材、次年度以降毎年のように新調する必要がある材料を手に入れ、ストックすることなどは、日常的に行っている。祭礼が終わると、町内の祝いの席に出席することも慣例となっている。

また、山鉦の車輪を製作するところが京都市内で減り続けていた当時、この鉦町から車輪製作技術を習得することを提案され、当時車輪を製作していたところに技術を学びにいった。現在、京都では車輪製作のできる場所はこの工務店一店となり、これまでも鉦建てを請け負っているところ以外のいくつかの山鉦町から車輪製作を委ねられてきた。

#### (d) 組織・集団内の関係とコミュニティ

##### 事例1：鉦建て 手伝い方頭 M氏

頭である M氏が、自分の会社の配下の者やその関係者などの人手を集めてチームを構成している。宮大工、左官、とび職、サラリーマン、自営業など職種はさまざまである。毎年、鉦建ての期間には会社に休みを取って参加するサラリーマンもいる。M氏にとって会社メンバーは日常時の仕事のメンバーと重複しているが、それ以外のメンバーとは祭り時期のみの関係である。

##### 事例2：鉦建て 工務店主 S氏

会社組織による請負なので、日常時の仕事のメンバーと重複している。店主 S氏のもとの、というよりも実際の組み立てでは、長く勤務し、鉦建ての経験も多いベテランの職人たちを中心に、日常的なチームワークで作業を行っている。

実のところ、山鉦町と鉦建ての人々の関係はそれぞれ組み合わせごとに異なる独自の関係がある。それをあえて共通の特徴を抽出・類型化してみると次のようなことがいえる。作事方と山鉦町との関係はとても深く、そして長く、毎年同じところが有償で請け負っている。何世代にも渡る（親方—弟子関係含む）ところも多い。山鉦町の運営組織・集団からすると、連絡を取るなどの直接的な関係を持つのは作事三方のそれぞれの頭や棟梁、長だけである。彼らのもとに、どのような人が参加しているのかを明確には把握していない場合が多く、作事方からすれば、それだけ全面的に任せられているということになる。

**2の小括** 実働する人々、組織・集団は町外の広い範囲から集まり、祭礼へ技能を提供している。提供される技能も、専門性の高い技能を必要とするものであり、有償である。

祭礼の中心となる“運営”組織・集団との関係は、「祭」に限られた非常に限定的で一時的、非日常的な関係であり、一見ドライですらある。事例 M氏が請け負う山鉦町保存会の人は、M氏のもとにどんな人が参加しているのかを知らなかったり（親方以外面識がない）、他の山鉦町の例でも、直接作業を頼んでいる親方の住む場所を知らないという話もあった。このように、“運営”組織・集団と打ち合わせなどで直接関わるのは親方や頭、元締めといった“実働”組織・集団を束ねる人々だけなのである。しかし、組織間の関係は一度成立すれば、よほどのことがない限りつきあいは長く、世代（血縁とはかぎらない）を超えて継続している。したがって、この祭縁の特徴は、高い信頼が根底にある関係といえる。“実働”する人々や組織・集団にとって、山鉦祭礼への関わりは、かなり限られた時間、関係に過ぎないにもかかわらず、山鉦町への愛着を持ち、山鉦町と関わることへの強い自負を持っている。町外ではあるが、山鉦町の伝統的共同を理解し、踏み込み過ぎない距離の取り方を維持してきている。

また、“運営”組織・集団との直接的な関係は限定的だが、それぞれの“実働”組織・集団内には、地縁や社縁に基づくコミュニティがある。これについては別稿に改めたいが、祭礼に関わる組織の柔軟な下部組織を形成しているともいえ、その出入りは比較的自由である。

### 3. 新たに始まる町内祭縁

#### (1) 町の変化と町の新住民

山鉾町のある地域は、既に見てきたように、かつては大店のならぶ商家の町であった。そして現在でも、京都市内随一の商業・金融施設の建ち並ぶ地域として活気にあふれてはいるが、非常に変化の激しい地域である。ひとたび大店がなくなれば、その跡地は大抵ビル・テナント施設かマンションへと変貌する。

表2：山鉾町別世帯数及び人口数の変化

| 番号 | 公称町名(山鉾名)  | 2002年 |      | 2012年 |      | 増減 |
|----|------------|-------|------|-------|------|----|
|    |            | 世帯数   | 人口総数 | 世帯数   | 人口総数 |    |
| 1  | 場之町(鈴鹿山)   | 29    | 35   | 67    | 74   | ▲▲ |
| 2  | 役行者町(役行者山) | 40    | 84   | 68    | 128  | ▲  |
| 3  | 螭螂山町(螭螂山)  | 223   | 429  | 347   | 702  | ▲  |
| 4  | 笋町(孟宗山)    | -     | -    | -     | -    | ○  |
| 5  | 烏帽子屋町(黒主山) | 96    | 179  | 207   | 379  | ▲▲ |
| 6  | 鯉山町(鯉山)    | 114   | 252  | 130   | 265  | ▲  |
| 7  | 山伏山町(山伏山)  | 6     | 11   | 69    | 126  | ▲▲ |
| 8  | 菊水鉾町(菊水鉾)  | 83    | 171  | 179   | 379  | ▲▲ |
| 9  | 三条町(八幡山)   | 102   | 166  | 107   | 175  | ▲  |
| 10 | 六角町(北観音山)  | 26    | 53   | 21    | 43   | ▽  |
| 11 | 百足屋町(南観音山) | 48    | 113  | 37    | 90   | ▽  |
| 12 | 小結棚町(放下鉾)  | 63    | 117  | 76    | 129  | ▲  |
| 13 | 骨屋町(浄妙山)   | 20    | 51   | 70    | 142  | ▲▲ |
| 14 | 橋弁慶町(橋弁慶山) | 10    | 25   | 39    | 72   | ▲▲ |
| 15 | 占出山町(占出山)  | 42    | 56   | 53    | 65   | ▲  |
| 16 | 天神山町(霞天神山) | 31    | 61   | 31    | 63   | ○  |
| 17 | 風早町(油天神山)  | 124   | 241  | 119   | 213  | ▽  |
| 18 | 太子山町(太子山)  | 141   | 280  | 139   | 264  | ▽  |
| 19 | 傘鉾町(四条綾傘)  | 56    | 69   | 158   | 177  | ▲▲ |
| 20 | 芦刈山町(芦刈山)  | 55    | 133  | 94    | 161  | ▲  |
| 21 | 木賊山町(木賊山)  | 66    | 144  | 63    | 143  | ▽  |
| 22 | 鶏鉾町(鶏鉾)    | 7     | 19   | 5     | 11   | ▽  |
| 23 | 白楽天町(白楽天山) | 38    | 66   | 232   | 445  | ▲▲ |
| 24 | 四条町(大船鉾)   | 71    | 118  | 163   | 235  | ▲▲ |
| 25 | 船鉾町(船鉾)    | 176   | 309  | 219   | 366  | ▲  |
| 26 | 岩戸山町(岩戸山)  | 38    | 83   | 46    | 78   | ▲  |
| 27 | 函谷鉾町(函谷鉾)  | 1     | 2    | 1     | 1    | ○  |
| 28 | 月鉾町(月鉾)    | 10    | 24   | 18    | 30   | ▲  |
| 29 | 郭巨山町(郭巨山)  | 15    | 36   | 44    | 83   | ▲▲ |
| 30 | 善長寺町(綾傘鉾)  | 73    | 108  | 107   | 156  | ▲  |
| 31 | 矢田町(伯牙山)   | 96    | 166  | 111   | 182  | ▲  |
| 32 | 燈籠町(保昌山)   | 131   | 267  | 160   | 257  | ▲  |
| 33 | 長刀鉾町(長刀鉾)  | -     | -    | 1     | 1    | ○  |

※増減の内容

- ▲：世帯数が増加した町内
- ▲▲：世帯数が倍以上になった町内
- ▽世帯数が減少した町内
- ：ほぼ変化なし

[出所] 京都市住民基本台帳より作成

表2は平成14(2002)年時と平成24(2012)年の各山鉾町の世帯数と人口数を比較したものである。これらはまた、住民の在住状況によって、a:家・土地所有者中心の町内、b:ビル・テナント化で居住者が少ないもしくはゼロの町内、c:マンション化による新住民のいる町内、の3つに分類することができる。

ここで全てについての詳細を展開することは出来ないが、この章の中心的な話題となり、分類cに当たる新住民とマンション化状況との比較のために、まず、分類bに当たるビル化の影響を受けた町内について述べておく。

高度経済成長期前後から、1970年代を中心に進んだビル・テナント化の影響で人口空洞化に見舞われた山鉾町内は、特に「鉾の辻」と呼ばれる鉾の集中する地域にあり、祭礼時には最も華やかになる場所である。表2にも示されているように、番号4の筭町、22の鶏鉾町、27の函谷鉾町、33の長刀鉾町がbに分類される町内に該当する。これらの町内がある学区の世帯・人口数は1960年頃のピークから1980年には半減し、その後も減少の一途をたどってきた。現在でも住民は非常に少ないか、もしくはゼロである。現在、これらの山鉾町で祭りを運営しているのは、かつて山鉾町に居住していた元住民や“町衆企業”<sup>13)</sup>と呼ばれるテナントの企業主たちである。そして、実働するのは、以前と変わらない、継続してきた町外からの祭縁による人々である。

さて、ビル・テナント化のおよそ20年後、それまでとは逆の“町内住民増加”現象が起こる。先の分類cに当たる1990年代以降に進んだマンション化の影響である。

再び表2を見ると、2002年から2012年の山鉾町の世帯数と人口数の変化では、「減少」した山鉾町は少なく、圧倒的に「増加」が多い。しかも単なる増加ではなく、倍増はもとより多いところで10倍近い増加である。これがマンション化の影響である。必然的に山鉾町の町内会にはマンション住民が会員として新規参入してくることになるし、山鉾町の祭礼にもなんらかの形で関わり、影響を及ぼす可能性が出てくる。町内の人口が増える(しかもマンションが一棟出来るということは住民増加も「一気に」起きることになる)ということは、さまざまなしくみが大きく変更される可能性をはらんでおり、こと祭にかんしては特にそうである<sup>14)</sup>。

## (2) 新たな関係の受容のしくみ

(1) で見たようなマンション化の状況に対して、山鉾町内はどのように変化したのであろうか。まずは、①新しいマンション住民が祭礼にどのように関わるのか、あるいは関わらないのか、その参加状況を見ていく。次に、②祭りの運営にたずさわる人々が祭礼維持のためにどのように対応したのか、ここではここ10年の間に4棟のマンションが次々と建った菊水鉾町の例を挙げて「新たな祭縁」の局面を考察する。

### ①新住民の祭へのかかわり方

新住民が祭礼において実践的な“実働”として参加することのできるものに、ちまき巻き、山鉾の試し曳き、祭り期間のちまきやお札販売などがある。これらはかつても

町内の労力で賄われてきた簡易な作業で、いくらかの謝礼がつく作業がある。しかし、マンション住民が“運営”に関わることは難しいようである。

(a) “実働” としてのかかわり方

[ちまき巻き]

吉符入り（7月1日～5日頃）の頃、農家から収められたちまきが町会所へ運ばれ、女性を中心とする町内の人たちによって、お札付け、飾り付け、袋詰めなど「ちまき巻き」と呼ばれる簡易な作業が行われる。家持住民、借家住民、マンション住民など町内住民のだれもが参加できて、コミュニケーションの場にもなっている。この作業には謝礼がついている。

[鉾曳き、山担ぎ]

主力は先に見た祇園祭連合会によって組織されている公的な「ボランティア21」であるが、メンバーは学生が多く、社会人もいる。このような公的なものに加えて、町内の伝手による私的ボランティアや、町内の人が関わる企業から人を集めたり、近隣の学校から人を集めるなど、私的なボランティアもある。人気のある役回りなので、町内の伝手で人が集まる。

ちまき巻きも鉾曳きも、これらは比較的気軽に参加が可能である。また、簡易で高い技能を伴わない作業に関しての人材調達は、かつてと同様、町内であり、無償（もしくはいくらかの謝礼をとまなう）である。参加者にしてみれば、その作業組織・集団への参加は自らの選択が尊重され、参加に際してのプレッシャーは比較的低く、また出入りの自由度は高い。「伝統的共同」への関心は希薄だが、祭礼に「たずさわっている」ことに対しては矜持を持っている。

(b) “運営” へのかかわり方

菊水鉾町では、山鉾保存会への入会は、保存会費を支払うことによってだれもが賛助会員となることができる。マンション住民も個別に参加することができる。現在（2013.5）、保存会会員メンバー57名中25名がマンション住民である。徐々に賛助会員への希望者が増えている。賛助会員から評議員や理事が選ばれるので、祭礼の運営の中心にかかわる可能性もありそうだが、保存会の理事や評議員に選出されるには、「祭りをよく知っていること」つまり町内の「伝統的共同」を理解している必要がある。現在、これまで囃子方のトップとして所属していた人や、永らく町内の企業に勤めて社長代理で祭礼に実践的に関わってきた人などが理事となっている。その意味では、マンション住民の賛助会員が理事や評議員になる可能性はまだ高くない。祭りに積極的に関わりたい住民がいる一方で、儀礼的なもの、伝統的なものに興味を示さない人々も多いのである。

実働に満足するか、運営を目指すか、祭りに対する人々の対峙の仕方は様々である。

②運営側からの新住民へのかかわり方

図1と図2の地図は、菊水鉾町内にマンションが建設される以前の町内の状況（1986年）と、マンション化後の現在の状況（2012年）を示したものである。マンションの第一棟目が2001（平成13）年に、二棟目が2002（平成14）年に立て続けに完成し、その後、三棟目が2004（平成16）年に、そして四棟目が2008（平成20）年に完成した。先の表2（番号8）を見ても、2002年から10年間の世帯数／人口数の変化は、83世帯／171人から179世帯／379人へと倍以上の増加である。

この鉾町を事例として、祭り運営の中心となる組織・集団が新住民を町内に受け入れるにあたって、どのように対応したのかを見ていく。

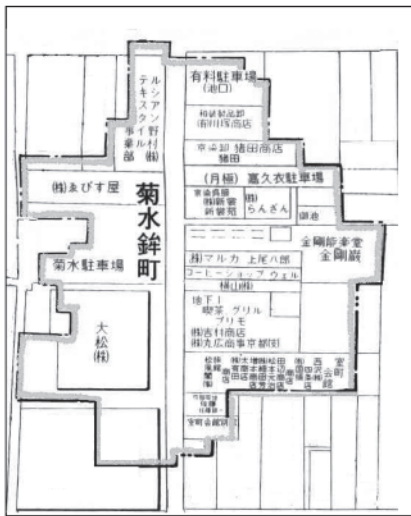


図1：1986年の菊水鉾町  
（ゼンリン地図加工）

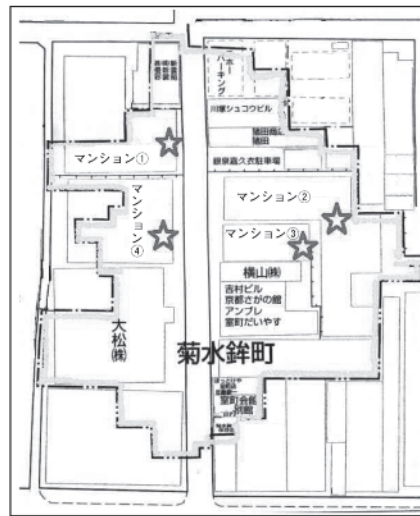


図2：2012年の菊水鉾町  
（ゼンリン地図加工）

(a) 祭礼のためのマンション

あるマンション建設の際には、設計の時点で、通りに面した2階部分から鉾に渡るための橋廊下をかけることができる場所（写真7）を保存会が賃貸することを契約し、また他のマンション建設の際には、通りに面して、祭礼当日に鉾を見ることのできるお茶席を設ける場所をマンションの設計段階で組み込み、保存会が購入契約をしている。ここは、祭り期間には通りから直接お茶席に上がることのできる階段を設けることが可能（写真8）である。ちなみに、このマンションは、祇園祭との関係を謳って宣伝され、販売開始後短期間のうちに完売したという。





写真7：マンション2階から鉾へ渡る橋廊下  
（筆者撮影）



写真8：祭りの時期だけのマンション2階  
お茶席へ上がる階段（筆者撮影）

(b) 町会費徴収のしくみと意味

マンション住民の町会費は、マンションの管理組合によってまとめて支払われることになっている。金額は一棟が40戸でも、80戸でもマンション一棟につき月額5000円である。つまり「マンションは一棟につき一人格とする」として認識されるというものである。具体的には、マンション住民は全て管理組合に入っているので、管理組合費からマンション全住民分として月額5000円の町会費を支払うことによって、マンションの理事長が代表として一票の権利を持つことになる。

これは何を意味するのであろうか。これには2つの理由があるという。一つは、町内会費を支払わなければ地元のイベントに参加することができないため、「各棟から町内会費をもらっている」という名目を作る必要があったことである。もう一つは、もしマンションの住民が一人一人格として、一権利を持って町内会に参加するとどうなるのであろうか、と考えると分かりやすい。町内は地図で見ても分かるように、戸建ての家は20軒足らずである。数の論理からすれば、一人一人格の権利では、町内にある様々な慣習や決め事が簡単にひっくり返されてしまう可能性がある。祭りのやり方や、極端に言えば山鉾巡行への参加の是非に関しても、マンション住民20名からの反対が出れば、祭りへの参加も不可能となる。そのため町内の祭りを運営する人々は、マンションが建設される以前に「マンション一棟で一人格」という取り決めを作り、入居希望者にはそれを前提に契約をしてもらうことを決定した。マンション住民の意見が簡単には反映されないしくみが作られたのである<sup>15)</sup>。

本来、数十戸もあるマンションができれば、住民一戸一戸から町内会費を徴収する方が町内としては潤うはずである。しかし、それよりも、祭礼の中心を担う“運営”組織の人々にとって重要なことは、伝統的共同を守り、維持することであり、その象徴・現れである儀礼性が正統に維持された祭礼が継承されることなのである。

彼らは、新規住民が入ってくることへの懸念に対して細心の注意を払っているが、

伝統的な祭礼のあり方ひいては町のあり方を維持するために、変化に対してただ閉鎖的、排他的なだけではない。周到で柔軟な様々な戦略を併せ持つのである。「祭は生き物。歴史に即した社会の動向に合わせたもの。(我々は)どのように共存していくべきか(を考える)。」という保存会の人言葉はその象徴であろう。

**3の小括** 都市の宿命的な変容は、少し前にはビル・テナント化による人口空洞化現象を引き起こし、今度はマンション化によって急激な人口増加現象をもたらした。これは、町内に古くから在住して祭礼の中心となってきた人々にも、新しく山鉾町内のマンションに居を構えた新住民にも新たな祭縁のあり方を要求することになった。その際、両者の祭縁形成の核になるのはやはり「伝統的共同」であり、ここで見てきた祭りの運営主体による(運営主体となるメンバーの決定や町会費徴収の方法にみる)決定事項にかかわる様々なしくみからも明らかなように、マンション住民はまだ伝統的共同からは遠い存在である。マンション住民は簡易な作業には参加できても祭の中心に入ることはできない。確かに、マンション住民であれば、保存会費を払うことによって賛助会員になることは可能であるが、理事になることはできない。つまり運営メンバーとして祭りに参加する資格は与えられていないのである。

とはいえ、確かに伝統的共同に関わる意識は希薄で、さらにマンション住民の多くが伝統的共同への関わりを深めたいと望んでいるわけではない。彼らにとって祭礼への関わりは数多くある「場」のなかの一つとして、である。自分たちは祇園祭のある地域の住民で、祇園祭に参加すること自体に誇りと楽しみを持ちたいと考えている。マンション理事長経験者は次のように述べる。「ここはたしかに閉鎖的などころがある。しかし、だからこそ祭が続いている。」彼らは、運営する人々がこだわる伝統的共同への客観的な立場と観点からの理解も示していた。

### むすびにかえて ——伝統的都市の複合的・相互依存的な共同性——

本論文では、山鉾祭礼に様々な個人や集団が重層的に関わっている様子について、それぞれの集団の「伝統的な神事(祭)や慣習に価値を見だし、これを共に保持しようとする行為」つまり「伝統的共同」へのかかわり方から、各集団間の祭縁を考察し、そこに成立する地域の共同性とはどのようなものであるかを考察してきた。

まず、山鉾町内においては、町内の伝統的な祭縁に基づいて町内の中核となり、かつ祭りの中心となる人々からなる組織・集団が、「伝統的共同」の維持を最優先事項と考え、強く意識しながら、祭礼の企画・段取り・資金繰り等の“運営”にたずさわっていることを明らかにした。

次に、山鉾町外にある組織・集団が、専門的な技能を提供することによって、祭礼における“実働”を担い、支えてきていることを明らかにした。特に彼らは世代を超え、

長期にわたって継続してきた祭縁のもとで、彼らの祭りに関わる誇りは「伝統的共同」への理解へとつながり、また山鉦町との距離の取り方によって、祭りに提供する技能同様、運営組織・集団から安定した信頼を得ていた。また、ここで見てきた町外の“実働”組織・集団には各々コミュニティが存在し、祭りはその規範を確認し、共同性を促す場となっていることにも言及した。

最後に、近年新たに山鉦町内に参入してきた新住民について取り上げ、「伝統的共同」への関心は希薄で、町内の伝統的価値観を共有していない人々が多いものの、簡単で非専門的な作業において“実働”することによって、地域的矜持を得て、拠り所の一つとなる可能性も見いだせること、専門的な“実働”組織・集団の人々とは異なり、伝統的共同を客観視しながらその必要性についても認めていたことを記述した。彼らに対して“運営”組織・集団は、ある部分までは祭礼のメンバーとして認め、そしてそれ以降は容易に中心部分に参入できないよう慎重に具体的な対応を重ねていることを明らかにした。

“運営”組織・集団が、町内外の人々・組織・集団に「依存」しつつも、伝統的共同への安易な参入が行われないように用意周到なくみをつくることは時に集団の「排他的」な性格として現れる。伝統的共同への理解の度合や節度が彼らにとっての様々な祭縁を結んでいくものさしとなっているようであり、このような伝統的共同を核にした複合的な相互依存性が都市祭礼における共同性の特徴となり、祭礼の継承と創造をもたらすのである。

本稿を著すにあたり、現地での聞き取りに応じて下さった、また現場作業を体験させて頂き下さった多くの皆様に深く御礼申し上げます。

#### 〔注釈〕

- 1) 八坂神社の御祭神である八柱御子神（八王子）、素戔鳴尊（牛頭天王）、櫛稲田姫命（婆梨采女）をそれぞれ三つの神輿に乗せて神社と御旅所間を練り歩く。
- 2) 応仁の乱（1476年）以前には58町から出たといわれている。現在の33町のうち一町は、2年前まで休み山であった凱旋船鉦であり、昨年から巡行には参加しているものの2013年現在では唐櫃での巡行である。
- 3) 山鉦は大きく「山」と「鉦」に分けられ、山はまた「曳山」と「昇山」に分けられる。鉦は車輪がついた胴組の上に囃子方が乗る床と屋形を乗せ大屋根をかけられており、その中央には真木が立てられる。長刀鉦、月鉦、鶏鉦、菊水鉦、函谷鉦、放下鉦の六つがある。他に船鉦、綾傘鉦、四条傘鉦の三つも「鉦」であるが、船鉦は真木を持たず、四条傘鉦と綾傘鉦は台車の上に大きな綾傘をかけた比較的簡素なもので、巡行する鉦の前に棒振という踊りと囃子を伴うのが特徴である。曳山は、外見上は鉦と変わらないが、「山」なので真木がなく、屋根の上に松を立てる。北観音山、南観音山、岩戸山の三つがある。昇山は胴組の上に舞台

があり、さまざまな趣向の人形と真松と呼ばれる松が立てられる。

4) “祭縁”とは、祭りに関わってむすばれる全ての関係のことであり、祭りのなかの関係性を見ていくことによって地域の共同性の現状を明らかにするという本論文の目的に則した枠組み指標としての概念である。それは、自らは選択できない血縁や地縁と重複する場合もあり、拘束性のある社縁と重複することもあるが、それ以外の契機も含まれる。非日常的、一時的・限定的であっても祭りに焦点づけられて「自発的に」組まれる縁（祭りの時にしか組まれないこともしばしば）のことであり、上野のいう自ら「選び取ることができる」、「社会関係に拘束性がない」“選択縁”（上野 [1984: 58]）の一つでもある。

5) 天延二（974）年に朝廷からお旅所を賜り、神輿巡行が始まる。これを祇園祭の正式な発足とする場合もある。

6) 清々講社への連絡、八坂神社宮司の来訪、保存会会長であれば、巡行の順番を決める籤取り式への出席もある。

7) 山鉦巡行のための「巡行補助費」は、現在、山であれば150～300万、鉦であれば450～500万が祇園祭協賛会から分配される。また、懸装品の修復、新調に支給される国・府・市からの「有形文化財補助費」の申請と受給、費消についても山鉦保存会のメンバーによって行われる。

8) 全33町の各山鉦保存会のメンバーを代表する人々から構成されたものが「祇園祭山鉦連合会」である。大正12（1923）年に組織され、平成4（1992）年に祇園祭山鉦連合会が財団法人へ、平成24年には公益財団法人となった。ここでは山鉦町への支援と統括を行うと同時に、山鉦祭礼に関して組織的にその伝統と格式を守ることを目的としている。各山鉦町の相互連絡を図り、山鉦巡行に関する諸事を取り仕切る目的でつくられた。情報交換、情報共有の場となっはいるが、それはあくまでも山鉦町全体の均衡を取り、足並みを揃えるためであり（その役割を持つのも保存会である）、各鉦同士が干渉し合うことはない。特に、公益法人化後には、それぞれの保存会のお金の使い方に目配りすることが大事なこととなった。

9) 現在学生を中心に社会人も含む650名ほどの男性が登録しており、これを利用する鉦は、山鉦町33町中20町ほどになる。

10) 幕藩体制が崩壊した後の明治期には、この寄町制度が廃止されるに至って山鉦祭礼は財政的な存続の危機に陥る。それに代わって明治8年に成立したのが祭礼の経費を援助する八坂の氏子たちによる協賛組織である清々講社であった。

11) もともとは寄町からの寄進に対して、山鉦町では笹でちまきを作ってお払いを受け、これを厄よけのお守りとして寄町に頒布するという慣習があった。その一部を囃子方が鉦の上から知り合いに頒布したことが、投げちまきの慣習となり、巡行を行う鉦上から見物客に配られていた。後にこの慣習は廃止されて、現在のような形になっている。また、販売はせず、全て関係者限定で配布している山鉦町もある。

12) 町人で百姓・地主を兼ねるのは普通の姿で、農繁期になれば、町から村へ農事の手伝いが出る。逆に町の祭りとなれば、村の人々がそれぞれの役割をになって祝祭に参加する。伝

統の根強い都市では、現今でも祭礼における周辺村落の役割が明確に規定されている。これなどは、日本の都市と農村の連担性を如実に示している（松平 [1983: 25-26]）。

13) これは三村 [2001] において、本稿と同じ山鉾町を対象とした研究のなかで、地域社会形成における企業の位置づけを明らかにするために設定された概念であり、「営利活動以外に地元コミュニティの諸活動を担い、そのための資金や場合によっては人材をも提供する『心意気』に燃え、同時に地域社会からも信頼されている企業」と定義されている。

14) これらの動きと対照的なのが分類 a のグループである。これは家・土地所有者中心の町内であり、マンション建設を反対してきた山鉾町である。増減の幅が他の町内に比して小さい。六角町や百足屋町がそれに当たる。

15) (藤本 [2007]) の事例によれば、茨城県のある氏子区域の地域では、宅地開発の結果、急激な新住民人口の増加によって氏子意識をもった旧来の住民が少数派となってしまった。さらに神社に対して好意的ではない人物が自治会長に選出され、住民アンケート実施の結果をもとに神社、総代に年度末をもって氏子離脱の旨の文書が提出された。氏子区域の他の地区の総代や自治会長などの取りなしで結果的に離脱は取り消されたが、人口が急増することの問題の大きさがうかがえる。

#### [引用・参考文献]

- 上田篤編『京町屋 コミュニティ研究』鹿島出版会 1971 年  
 上野千鶴子「祭りと共同体」井上俊編『地域文化の社会学』世界思想社 1984 年  
 大谷栄一「宗教は地域社会をつくることができるのか」大谷栄一、藤本頼生編著『地域社会をつくる宗教』明石書店 2012 年  
 祇園祭編纂委員会、祇園祭山鉾連合会編著『祇園祭』筑摩書房 1976 年  
 田中重好『共同性の地域社会学—祭り・雪処理・交通・災害』ハーベスト社 2007 年  
 田中重好『地域から生まれる公共性—公共性と共同性の交点』ミネルヴァ書房 2010 年  
 藤本頼生「近代の神社法令の整備過程と関係法令概説書にみられる「神社」概念—神社・氏子の意義を中心として—」『神社本庁総合研究所紀要』第 14 号 2009 年  
 藤本頼生「地域社会と神社」大谷栄一、藤本頼生編著『地域社会をつくる宗教』明石書店 2012 年  
 松平誠『祭の社会学』講談社 1980 年  
 松平誠『祭の文化』有斐閣 1983 年  
 松平誠『都市祝祭の社会学』有斐閣 1990 年  
 松平誠『祭のゆくえ』中央公論新書 2008 年  
 三村浩史 リムボン編著『町衆企業とコミュニティ』高菅出版 2001 年